

薬害を学び再発を防止するための教育に関する検討会 資料

「薬害資料データ・アーカイブズの基盤構築」研究報告

2020年 3月 9日

研究代表者 藤吉圭二

(追手門学院大学)

本研究は、2010年4月に「薬害肝炎事件の検証及び再発防止のための医薬品行政のあり方検討委員会」による、「すべての国民に対する医薬品教育を推進するとともに、二度と薬害を起こさないという行政・企業を含めた医薬関係者の意識改革に役立ち、幅広く社会の認識を高めるため、薬害に関する資料の収集、公開等を恒常的に行う仕組み（いわゆる薬害研究資料館など）を設立すべきである」との指摘を受けて用意された科学研究費によって組織され推進されてきたものである。2019年度における本研究の進捗についてご報告したい。

今年度は、(1) 研究協力者・島津良子氏（奈良女子大学）を班長とする文書資料調査班、(2) 研究協力者・佐藤哲彦氏（関西学院大学）を班長とする薬害被害者インタビュー映像調査班を中心として研究、および(3) 薬害被害当事者と「被害」をテーマとする国内資料館の見学、アーカイブズ学会における研究活動の報告を行った。

(1) 文書資料調査班

大阪人権博物館（リバティおおさか・大阪市浪速区）に資料保管と作業スペースを提供していただき、島津班長のもと奈良女子大学、京都大学の大学院生を中心とする作業メンバーが調査・整理・目録作成にあたっており、おおむねファイル（簿冊）レベルでの目録作成が完了している。アーカイブズ管理を万全なものとするには、このレベルからさらにアイテム（件名）レベルでの目録作成が必要である。（ファイルレベルとは、ファイルやノート、スクラップブック、さらには大封筒など形状はさまざまだが、ひとまとまりの冊子や包みの中に含まれている複数の書類一点一点のレベルをいう。そのまとまりの中に実際どのような書類等が収められているかは、ファイルレベルの目録からおおよそ見当をつけられるものの、具体的にはアイテムレベルの目録なしに資料の特定をすることは不可能である。）これを活用して薬害被害者団体向けのレクチャー、ワークショップを実施することにより、被害当事者に薬害資料のアーカイブズ管理・活用へのイメージづくりを進めた。

(2) 薬害被害者インタビュー映像調査班

佐藤班長のもと班長の所属する関西学院大学の大学院生を作業メンバーとして、インタビュー映像の調査と分析を行った。これまでの研究成果から、薬害がいくつかの言説パターンによって成り立つことが明らかになっており、薬害被害者も、それらの言説を利用しつつ自らを呈示することがわかっている。したがって、自己認識やアイデンティティのあり方、薬害との距離のとり方などはそのような語り方によってさまざまであり、インタビュー映像から得た、これらの諸点を分析・整理することにより、薬害という出来事の高層性を示すこととした。さらに、インタビュー映像の展示の仕方を通じて、そのような高層性をどのように示すことができるかということについても検討した。

(3) 薬害被害当事者への研究活動報告会

この他に展示や資料公開に関して意欲的取組みを行なっている国内外の先進的な博物館施設を被害当事者と一緒に訪問して担当者等から聴取り調査を実施し、具体的な展示や資料公開方法の参考にできる材料を集めることにも努めた。被害当事者には健康上の理由もあるため、国内の施設（公害資料館、ハンセン病資料館）を共同調査した。

- ・西淀川・公害と環境資料館(愛称：エコミュージズ) 11月24日(日)
- ・国立ハンセン病資料館 12月8日(日)

また、1月25日(土)に大阪人権博物館にて開催された日本アーカイブズ学会2019年度第2回研究集会「薬害の記憶を伝えるために—薬害資料館をイメージする—」において、当見学内容について報告した。

<今後の課題>

- 被害者の高齢化・団体の解散にともなう引き受け資料の増加
- 資料の受入れ、保存に関するルールづくり（権利関係も含めた）の必要性